

## [読む館長講座⑦]

東北歴史博物館館長講座概要

2022年10月22日

「東北グローバル考古学 part2—原始・古代のロマンと科学—」⑦

### 「首長」から「王」へと至る道

阿子島 香

#### はじめに

現代の世界は、また「国家の時代」とも言われます。地球上のあらゆる場所は、国境線で区切られていて、その線をめぐって紛争が絶えません。国境線は、数百キロ以上にわたって直線であったり、川や山脈を境としていたり、過去の戦争などによる場合もあったり、さまざまです。海上の孤島の所属が、紛争の材料にもなっています。歴史的な結果が積み重なって、現代の国境が出来上がりました。条約と実効支配の関係が、しばしば議論されます。日本も例外ではありません。ところで、こんな分かり切ったことをなぜ館長講座で取り上げるのかと、問われる皆さんもいらっしゃるかと思います。

けれども、当たり前「国境がある」というのは、それほど古くからのことではありませんでした。そもそも私たちが、当然あるものと思う「国」「国家」は、いつから、どのようにして存在するようになったのでしょうか。今回の講座では、「首長」（地域の首長）が、どのようにして「王」（国家の王）という存在に至るのだろうか、少しだけ考えを深めてみたいと思います。

今回講座は、内容的には次回「古代東北と世界の六大文明」とワンセットとして、合わせてご理解いただければ幸いです。国家が成立し文明が成熟するという、一連の動きについて、私なりの視点で探りたいと思います。副題としました欧米考古学の用語「複合社会」（Complex society）に至る道筋を考えてみます。このテーマは人間の歴史にとって、実に多くの課題を突き付けるものです。国家の起源論ですが、これは権力とは何かという本質論に触れることとなります。クニの始まり、ムラからクニへの変化、「階級社会の成立」「戦争の始まり」、そして平等社会から階層化社会へ、などの諸課題です。

日本列島では、地域首長とヤマト国家（「前方後円墳体制」）との関係を問うことにもなります。スライドは仙台市若林区遠見塚 1 丁目、遠見塚古墳の空撮です。全長 110m、面積 18800 m<sup>2</sup>の、仙台地方最古級の大型前方後円墳は、4 世紀末頃に、なぜ、いかに、ここに存在したのか、改めて考えることにも通じます。

なお英語圏では、「複合社会」は、文明、国家とほぼ同義に用いられます。後述の「首長制社会」の一部を含む学説もあります。

## 「国家」と境界

近代世界は、たとえば遊牧民が自由に往来していた場所に、国境線を引きました。近代に生きていた狩猟採集の人々にとっては「国」という概念は、少なくとも外来の考え方でした。開拓時代の北アメリカ東海岸では、部族と部族の連合体は存在しましたが、国家を形成してはいなかった歴史が、記録されています。イロコイ連合が有名です。近世・近代ヨーロッパが盛んに奴隷貿易の対象とした西アフリカでは、民族が互いに抗争することになり、一部は国家的存在となっていました。後述の「初期国家」、アシャンティ国などです。

人類史という視点で、いくつかの例を取り上げてみました。一方で、古代日本では、「倭」の国というまとまりが存在し、朝鮮半島の三国（高句麗、百済、新羅）、伽耶と並んでいました。中華帝国・文明圏の周りで、東アジア世界では、確かにすでに「国家」が大きな役割を担っていました。春秋・戦国の世も「国」の興亡で語られ、秦、前漢、後漢の「帝国」が分裂しても、戦乱の中で「国家」の盛衰を軸として歴史が語られます。三国志（正史三国志）の中に、魏書>東夷伝>倭人の条があり、「魏志倭人伝」として、弥生時代に関する貴重な文献となっているのは、皆さんご承知の通りです。邪馬台国や卑弥呼の話題になれば、議論が尽きることは決してありません。奴国（なこく）、伊都国（いとこく）、他の「国」は、世界の人類史的に見て「国家」と言えるのでしょうか、諸説あるでしょう。

## 文化人類学的視点

では縄文人の社会はどうでしょうか。縄文土器の諸型式の分布の広がり方、土器型式内部での強い斉一性と外部との峻別、遠隔地の貴重な物資（ヒスイやアスファルト、希少貝殻など）の広い流通、日常生活の必需資源の広範な交易（内陸への「塩」「サカナ」、産地からの「石器石材」）、集落が大規模になったムラの構成、土偶や装身具に見られる精神文化の高揚などに見られるように、狩猟採集社会としては、世界的にも顕著な発展を果たして、定住生活を成熟させました。私は、先学諸賢にならい「高度に発達した部族社会」と捉えております。しかし、世界遺産にも登録された北海道・北東北の縄文社会で「我らは〇〇族なり。そして我はそのうち××氏族なり」といった社会統合は、あったかもしれませんが、国というものはありませんでした。

講座では、いったい「国家」というものがどのようにして成立してきたかという、大きな課題への手掛かりとして、アメリカ文化人類学の「文化進化」の考え方と、宮城県郷土史研究による考古学資料を、組み合わせて考えてみようと思います。両者は全然違う分野のお話で、互いに「なじまない」のではないかという印象は、普通に持たれると思いますが、人類の歴史を比較研究の方法で解明しようとする「プロセス考古学」の立場では、ごく自然な発想なのです。

アメリカでは、考古学教室は、大体どこでも人類学部、人類学科に含まれています。教員の組織、学生の所属、カリキュラム（必修・選択科目など）、学位論文審査、学会の構成、

研究費の配分など、いずれについても「人類学としての考古学」という存在になっています。日本の考古学教室は、おおむね歴史学科、史学科に所属しているのと、対照的です。もちろん、どちらのシステムが優れているかという話では全く無くて、両者の相異を理解することが、研究の進め方や考え方を理解する前提になっているという意味です。たとえば両国の考古学専攻学生たちに、「母方交差（交叉）イトコ婚」「ロベスピエールとジャコバン派」の説明を求めれば、有意な差がでるでしょう。私は幸運にも、両方の国で研究した経験を持つことができましたので、弥生社会を文化人類学の理論で読み解くというような試みに誘惑されるわけでありませぬ。

「**比較考古学**」(令和3年度館長講座概要①)の考え方では、様々な地域や民族の事例を、実証的に研究して、法則的な傾向を探ります。そして、なぜ、いかに文化が同じような方向で変化していくのだろうかと考えていきます。遠い過去の世界は、もうありませんが、現在も含めた比較により考古学の資料が語ることを再現し、文化プロセスを考察していきます(ミドルレンジセオリーの考え方)。講座では、東北地方の弥生時代から古墳時代への変化について、少し取り上げてみます。もちろん先学の多くの先生方が長年の間、取り組んで来られた課題ですので、何か結論を求めるといふようなことではなく、一つの考え方として、捉えていただければ幸いです。

アメリカ新進化主義人類学による、「首長制社会」(Chiefdom)という段階について考えてみることにします。バンド、部族、首長制、初期国家という発展段階学説の一部になります。

### 地域首長と有力者

一般的に「首長」という場合、現代社会でも「くびちょう」と日常会話の中で使われるように、地域のリーダーないし指導者、現代日本なら選挙で選ばれる長(おさ)を指すでしょう。考えてみますと、地域的な首長という存在は、いったい、いつから、どのようにして存在するようになったのでしょうか。繰り返しにはなりますが、今回の「お題」でもあります。果たして縄文時代はどうだったのでしょうか？　そもそも旧石器時代には、リーダーはいたのでしょうか？　どういう人たちだったのでしょうか？　大きな古墳は、どんな仕組みで、何のために築造されたのでしょうか？　同じような意味の言葉で、「有力者」「ムラオサ」「酋長」「族長」「支配者」「権力者」「王」と並べてみますと、意味は次第に強くなり、またLeader(指導者、統率者)の意味が大きく変質します。

一方で、「豪族」という言葉は、歴史的にかなり幅広く使用されています。国家成立を前提にしなくとも、〇〇盆地でかつて勢力を持った豪族、のようにも使われますし、古代国家が確立してから成文法(律令制社会)による統治が全国的に実施されるようになった後でも、〇〇盆地の豪族は寺院を建立し、郡家(ぐうけ、こおりや、「郡衙」と同義)の立地は横穴墓の分布と関連が認められる、のようにも使われますし、国家統治の外の人々(蝦夷)についても、〇〇盆地の豪族は激しく抵抗した、のような表現も普通です。意味的には、「在地

首長層」に近い言葉でしょうか。

### **在地首長層と国家的古墳造営**

館長の考えでは、初期国家組織が成立した舞台であった畿内地方以外の、日本列島の各地においては、とくに東北地方のような、国家的中心から見ての周縁地域においては、日本全体の国家成立プロセスの前から後までを通して、在地首長層の存在が非常に重要でありました。地域の内部での社会構成体の動向が国家成立を導いた中核地域とは異なり、中核地域との関係によって、類似する文化現象（古墳前期の前方後円墳、前方後方墳の造営）が生起していったと考えます。中核地域との関係の必要性や強弱によって、見かけ上の類似現象の盛衰があったかもしれません。

地方の生産力と生産関係による階級分化、それをダイレクトに反映する古墳造営という面よりも、同様な地域内階層社会（在地首長層の地域内での、長期的な継続）が、中核地域の国家との関係の状態にかかわらず存続し、地域社会自体の発展過程となっていたという仮説です。従って、それぞれの地域での古墳の継続や系譜は、その地域での生産力の発展自体の指標、社会システムの変動の指標と捉えるよりも、地域間関係の在り方の反映と捉えたほうが、実態に近いのではないかと考えています。盆地ごとに、大型古墳が営造される時期がありますが、盆地内で継続的な造営存続が系譜のようにあるわけではなく、途切れたり復活したりします。大きく見れば、東北の中南部で広く造営が拡大、造営の低下、が共通する時期に起きています。しかし、このことはそれぞれの盆地や平野ごとの生産力および階級構成の変化を、必ずしも反映するわけではなくて、前方後円墳を造営するということに示される対外的関係（盆地、平野から見ての対外的）の変化の反映があるのではないかと考えるわけです。（諸説あります）。

ですから、日本列島の国家成立を考えるにあたって、国家の周辺地域での地域社会の実態を考察することが一層重要となります。国家としての統治組織、権力の執行プロセス、被統治民を従属させる機構など、初期国家を構成する要件は、中核部と周縁部とでは、相違していた可能性があると考えます。人類学上の議論に「分節国家」(segmentary state) という類型概念があります。中央と地方は同様な構造を有する並立しうる単位である。地域それぞれにまとまりがあり首長が存在するが、国家としてのまとまりは地域の分節を経由して実効的になるというものです。「前方後円墳体制」として日本列島の初期国家が成立したという理解の中に、地方における分節的な在地首長層による社会統合ないし支配を、その一部として認識していくべきではないでしょうか。

### **「原始共同体」の分解という古典的歴史観**

次に、地域「共同体」の内部構成を考えてみます。「階層分化」から「階級の発生」「国家の成立」に至る社会的過程は、経済史学分野の理論においても「余剰生産物」の形成と蓄積、「生産手段」の所有形態など多くの概念があり、先学によって長く論じられてきました。中

でも唯物史観史学の影響は大きいものがあります。「アジア的生産様式」論争も重要でした。欧州古典古代の社会とアジアの「総体的奴隷制」などが議論されました。また古代文明の研究では、灌漑農耕、水利の問題（ウイットフォーゲルの学説が代表的）、集団の統御、集団間の抗争と戦争の起源などが、論じられました。欧米では、加えて「民族学」分野による研究が多く成果をもたらしました。

農耕の起源について考えた回（読む館長講座 第3回「**農耕をしないという選択**」参照）でも取り上げましたイギリスの偉大な考古学者、ゴードン・チャイルドに再びの登場を願います（スライド）。チャイルド（1892 - 1957）は、オーストラリア出身ですが、エディンバラ大学、ロンドン大学で研究・教育を行ないました。「文明の起源」「考古学の方法」などの著作は、古典というにふさわしく、日本考古学にも大きな影響を与えました。学史的に見ますと、チャイルドの考古学の学説は、史的唯物論（＝唯物史観）、ないしマルクス主義の歴史理論に立脚していました。

「新石器革命」で農耕社会が成立してから、「都市革命」に向かい国家が成立する人類史の発展段階論は、現在も社会進化の考え方のベース（基点）になっているといっても、過言ではないでしょう。教科書的にもさまざまに表現されるシナリオです。農耕社会は、生産力を上昇させ、社会内に「余剰生産物」を発生させて、蓄積が進みました。複雑な社会組織が形成されて、階層化は進行し、また人々の集住が進んで、中核的な場所に都市が発生し、そして権力と国家が生まれていきました。

### 「社会進化」における連続と不連続

広く定説化したシナリオでは、原始共同体の段階の平等な生産様式から、次第に階層分化が発生し、やがて支配関係を有する階級社会に至るという道筋が、いわば**連続的**、換言すれば**漸進的**に進行したものとされる史観です。ここで館長的仮説として、縄文的部族社会、すなわち平等でありながら、汎部族的結合システムで広い社会ネットワークを形成していた社会と、王権という国家権力が誕生する古墳時代社会との間には、かなり普遍的に「首長制」という、質的に異なるもう一つの段階が存在した可能性が指摘できるのではないだろうか、と考えるところです。**非連続的な段階説**と言えるかもしれません。

首長は共同体ないしその連合体のために役割を果たして存在する社会組織から、王として君臨する存在に転化し、そこに階級的な国家が成立するという考え方です。どのようなプロセスで質的転換が起きたかが、追究課題になるでしょう。また古代国家では、祭政一致、神聖政治などと言われますように、宗教的な権威が、現実の政治と一体化しているのが一般的です。そして、部族、首長制、初期国家をずっと通して、このような思想的（多くは神話的、宗教的）背景と現実政治との一体構造は、かなり普遍的に認められました。

### 新進化主義人類学派

さて、プロセス考古学では、文化変化をめぐる理論に「新進化主義人類学」があります。

代表的な人物には、第1世代のレスリー・ホワイト、ジュリアン・スチュワード、第2世代のマーシャル・サーヴィス、エルマン・サーヴィスなどが挙げられます。しばしば館長講座で取り上げるビンフォードは、1950～60年代に進化人類学の牙城であったと評価される、ミシガン大学での、ホワイトの教え子です。またスチュワードは環境適応を考える「文化生態学」の祖とされます。これら4人は、いずれも世界の現代考古学に、大きな影響を与えました。

今回は、サーヴィスらによる「社会文化的統合のレベル」(levels of socio-cultural integration)という考え方を取り上げてみます。サーヴィスは、世界の民族誌を集成した上で、社会組織の複雑さには、分類できる諸形態が存在すると論じました。現在も大きな影響を持つ考え方です。単純な方から、バンド社会、部族社会、首長制社会、そして初期国家です。より複雑な類型にあっても、より単純な形態の属性は消失するのではなく、継続しており、その基層の上により複雑な仕組みが重層するという考え方です。

### 杉山晃一先生のこと

私が東北大学に入学した頃、文学部には公式に文化人類学を学べる研究室がありませんでした。文化人類学は、文学部附属日本文化研究施設におられた故・杉山晃一先生が、共通授業として講義をされていました。私はご迷惑も省みず先生の研究室を訪ねて、考古学を志して文学部に入学したが、文化人類学を本格的に学びたいのですと、相談をしました。1974年秋に、先生はタイ国でのフィールドワークから戻られたところでした。先生は、研究室がないのですから、どこかに身を置いて、実質的に文化人類学を学ぶしかないのでしょう、と指導をされて、そのようになりました。

同じような「同志」の学生仲間が何人もいて、杉山先生の部屋は、一種サロンか、隠れ家的場所と化しました。当時の大学は全国的に、「講座制」のしぼりがかかり、今では想像できないような固さが現実に存在していました。いわば「二足のワラジを履く」勉学には、それなりの苦勞が伴いました。今は昔、であります。私たちは「杉山塾」と自称していました。私的な読書会を主宰されて御指導を受け、何年間か取り組んだのが、新進化主義人類学のエルマン・サーヴィスによる、民族誌をまとめた「Profiles in Ethnology」(1971, 2nd edition)でした。

やがて、仙台市周辺の、広い意味での人類学を教えている先生方は、「時々気楽な集談会を開く」として「東北人類学談話会」を組織されました。第1回は1976年で、その後に継続して、現在は175回を数えているとのこと。1993年に教養部廃止と連動して、文学部に「文化人類学講座」が設置されて、文化人類学研究室が出来ました。それからは、同研究室がこの談話会を発展させています。同研究室のHPには、「東北人類学談話会」の項目があり、同会の歴史が詳細に公表されています。2003年の第100回記念として、東北地方における人類学の教育・研究の歴史と展望が論じられ、同研究室による雑誌『東北人類学論壇』第3号に掲載されています。(ダウンロード可)。

その中の記録に、第9回、1979年4月27日に「米国新進化主義における未開社会の諸形態」という研究発表があり、学生であった私たち、阿子島、沼崎一郎氏（現在、同研究室教授）、小林正史氏（現在、北陸学院大学教授）の共同でした。この頃から、首長制社会や国家形成について、考古学研究室でずっと過ごしていた私の関心が継続していたと、ある種の感慨があります。杉山読書会は何年も続き、メンバーも変わりましたが、それぞれが大いに学んで、各自の道に活かしていきました。改めて杉山先生の学恩に感謝いたしますと共に、このような、制度にしばられない、**自由な学びの意義**を、改めて強調したいと思います。

ところで脈絡は全然違いますが、博物館に来て学ぶというのも、来館者それぞれの自由意思で来られていますので、大切な時間となるよう願っております。ご来館、有難うございます。

### 進化主義人類学の「新」と「旧」

サーヴィスら、新進化主義という学派名は、「旧」進化主義に対するものとなります。19世紀後半に、ルイス・ヘンリー・モルガンに代表される文化進化論が広く受け入れられました。当時の世界は欧米列強による「帝国主義」の時代でした。モルガンは「古代社会」（Ancient Society, 1877）などの著作で知られ、人類の歴史は「野蛮」「未開」「文明」の、さらに各細分段階を経て進化してきたという理論を提唱しました。人類最初の婚姻形態を「原始乱婚」とするなどの部分が有名ですが、文化のさまざまな側面について、当時得られていたアメリカ・インディアンなどの資料をもとに詳細に論じました。（『古代社会 上・下』青山道夫訳、1986 他、岩波文庫）。たしかにマルクス主義の理論に影響を及ぼしましたが、本来は民族学の学術書でした。エンゲルスによる『家族・私有財産および国家の起源』（1884）などの論拠になりました。

その後 20 世紀を迎えて、アメリカの人類学界には大きなパラダイム転換がありました。旧進化主義は、現実の民族誌的事実を反映しておらず、進化のグラント・セオリーは根拠薄弱として、否定されました。それに代わって、アメリカ文化人類学の「父」（パパ・フランツ）とまで言われた、フランツ・ボアズに指導された実証主義的な民族学が学会を支配し、緻密なエスノグラフィー（民族誌）が蓄積されていきました。余談ですが、私はアメリカ留学中に、大学図書館の奥で、この頃、20 世紀前半の民族誌の書棚や、当時の雑誌の棚をさまよって、その膨大な人類経験の記述の集積を目の当たりにして、圧倒され驚いた記憶があります。19 世紀の古典的進化主義の時代には、理論家たちは文献研究を主としていました（いわゆる安楽椅子人類学 Armchair anthropology）。ボアズ学派以降は、1 年以上にわたる長期的フィールドワークが前提とされました。ヨーロッパの機能主義人類学派でも同様でした。

民族誌は人類学の基礎であり、それぞれの民族誌が生まれるには、人類学者個々の、長期的な参与観察（フィールドワーク）があるのです。アメリカ人類学は、先住民に対して差別的であった、との批判は確かに当たっているとは思いますが、しかしこのような人類の経験

を営々として記述・記載していくという学派によって、消滅してしまう文化遺産が記録されたという一面も、また存在したに違いありません。あらゆる学問には、いろいろな側面があるということに、これも改めて思い至ることです。

1950年代になりますと、ボアズ学派が依然として支配的な中で、蓄積された民族誌に立脚した新たな考え方が、再び人類文化の発展段階を論じるようになりました。膨大な民族誌を前提として、理論化を試みた一派が、新進化主義と言われた前述の研究者たちでした。

### 「未開社会の諸形態」

サーヴィスの著作での、4つの形態（段階）に位置付けられている民族は、次のようなものです。

バンド社会（band）。

オーストラリアのアルンタ族、南米のヤーガン族、インド洋のアンダマン諸島民、カナダのコパー・エスキモー。

部族社会（tribe）。

シベリアのトナカイ・ツングース、北米大平原のシャイアン族、ナイル川上流のヌアー族、北米南西部のナヴァホ族、南米のヒヴァロ族。

首長制社会（chiefdom）。

北米北西海岸のヌ〜トッカ族、メラネシアのトロブリアンド諸島民、ポリネシアのタヒチ島民、フィリピンのカリంగా族。

初期国家（primitive state）。

南アフリカのズールー族、メキシコのマヤ文明、ペルーのインカ文明、西アフリカのアシャンティ族。訳語には、「未開国家」「原初的な国家」もありますが、「未開」という日本語は一種差別を感じさせて今の時代にそぐわないですし、原初とは始まりの状況を言うので、例示されたような諸文明を含みますから、「初期国家」としてみました。

（講座では、具体的なスライドにて、民族の概要とようすを、ごく簡潔に説明。それぞれの民族誌の詳しい解説を始めると、それだけで館長講座は時間が過ぎてしまいます。失礼しました。）

### 首長制の事例から

首長制社会は、首長国（chiefdom state）といわれることもあります。ここでは、「国」とは区別しています。この社会組織的形態は、「部族」と「初期国家」の間の段階と考えられ、世界的に広く存在が認められています。一般生産者から区別される「首長」ないし「貴族集団」が存在し、社会統合の中心になっています。部族社会よりも高い生産性があり、また資源に余剰が存在することが、この社会形態の前提にあるとされます。マルクス主義的な社会発展段階論では、階級の分化はしばしば「搾取」と捉えられて、いわば発生期の首長たちは「悪役の始まり」的なイメージを伴うようですが、こちらの首長制類型の場合、共同体ない

しその連合の、全体の役に立つ、地域に貢献を為すことで、首長たちは存在意義を保持するというモデルになっています。そして首長制社会は、環境適応に関してより強固であるとされます。まとまりの内部での生産の確保という面で、適応的であると考えられました。

首長制社会の仕組みとして、しばしば強調されるのは、「生産物再分配型」のモデルです。生産の余剰は、首長を通じで「再分配」され、そのことによって首長は威信の維持と、平民の支持を得るのであるとされます。主としてポリネシアの民族誌から、いくつかの類型が記述されています。サーリンズがまとめた学説で、図のように（スライド）、地域によって違いがある各種の生産物が、いったん首長の下に集められて、それが改めて各地域に再配分される結果になるような、社会的過程があります。

つまり、地域相互の間の生産物の種類や、生産の凸凹を、首長を経由することによって標準化するという社会的機能を、首長は担っているというモデルです。親族組織が重要な役割を果たしています。出自を辿る場合、父系、あるいは母系という単系出自が基本ですが、ポリネシアでは、父系・母系を選択的にたどることができる「ラメージ型」の組織が注目されました。首長制社会は、部族社会よりも高度の社会的組織化を実現していました。

社会の複雑さの段階にも諸島の間で差異が存在します。ハワイ、タヒチ、トンガ、サモア、イースター島、マルケサス島、ほか。またポリネシア政治社会組織の進化についての学説も多くありました。ここでは後藤明氏（南山大学）による紹介で、プロセス考古学との関連を説明しました（考古学ジャーナル、296号、1988年）。

### トロブリアン諸島のクラ交易

首長制社会に分類される中で、メラネシアのニューギニア東方海上にある、トロブリアン諸島民が、とくに有名になっています。これは、マリノフスキーの業績によるところが大きい研究史があります。マリノフスキー（Branislaw Malinowski、1884-1942）は、ポーランド出身のイギリスの人類学者で、学史的に非常に重要な人物です。文化を構成する諸要素の相互関連に着目し、文化を統合された全体として捉える機能主義人類学の祖とされます。第1次世界大戦のためにイギリスに帰国できなくなったという事情もあり、トロブリアン諸島で長期的な参与観察を行なって、文化人類学の研究方法の画期となりました。1922年に出版された『西太平洋の遠洋航海者』（講談社学術文庫に邦訳があります）は、人類学の古典とされます。

クラ交易では、赤い色の貝の首飾り（ソウラヴァ）と、白い色の貝の腕輪（ムワリ）が、決まったルートに従って、決まった方向に交換されていきます。ソウラヴァは時計回り、ムワリは反時計回りの方向で、広大な海の島々の中で回り続けます。それらは固有の名前を有していて、歴史的な物品の由緒が、威信を持って語られます。（脈絡は全然違いますが、私はイメージ的に、古来の茶道具の「名物」とか、日本刀の由緒ある「号」のようなことを連想します）。カヌー製作、航海や交易には、種々の複雑な呪術が伴っていて、島々の間での儀礼的交易が社会関係と結びつきます。交易の相手方は、歴史的に決まっている人たちです。

交易は、対価交換ではなくて、永続する人間関係を前提とした「互酬性」(互惠性ともいう、reciprocity)に基づきます。クラ交易と共に、多くの物資も交易されます。マリノフスキーの民族誌では、現地の文化が生き生きと活写され、感動的ですからあります。

### ビンフォードの複合社会論から

ビンフォードは、考古学の方法論と実践を、一般市民向けに解説した名著『In Pursuit of the Past』(1983)の中で、人類史の発展段階についての重要な課題を二つ選んで論じています。農業の起源と、複合社会の成立です。この本は植木武氏他によって2021年に邦訳が出版されました。私は書評を訳書、原著の二度、行なっていますので、興味ある方はご参照くだされば幸いです。(2022年『季刊考古学』158号、1985年『考古学研究』124号)。

第9章「複合化への道のり」の中で、権力者がどのように発生してくるのかについて、彼なりの考え方を示しています。人間集団の適応過程が、文化変化・文化進化をもたらす原理であるという、初期人類の猿人の時代から、国家成立までを通しての「適応的な文化観」(本書中しばしば、私はダーウィン主義者であると表明していますが)で、考察を進めています。チャイルド流のマルクス主義的な発展段階論には批判的立場をとります。環境に対する適応プロセスを、文化進化の大きな要因とみなすのは、いかにもビンフォードらしいところと言えます。賛否両論があるでしょう。

北米の東部は、大規模な社会組織が形成されて、国家の段階により近づいた(が複合社会は成立しなかった)地域です。河川を遡上する水産資源の獲得に有利な場所に集落が集中したこと、北米先史社会での非常に広範な希少物資流通の事実などをあげます。サーリンズの学説であった生産物再分配型首長制社会については、その実在性に疑問を投げかけています。むしろ、権力が発生するメカニズムとして、ニューギニアなどに認められる「ビッグマン」型の社会を重視します。これは、有力者のもとに人々が集まり、人口移動を伴う社会変動によって、集団に環境適応上での有利さがもたらされるという考え方です。複合社会の成立には、何らかの「約束を反古(ほご)にできる状況」が発生することを考察しています。相互的な互惠性の原理(掟のような原理)が働かなくなり、権力者が生まれることにつながるという考え方です。

重要な指摘であると思いますが、東アジアの東縁にある日本列島の場合、また北米やポリネシア、メラネシアなどとは大きく相異なるような、生産の仕組みと社会的関係を理解することが必要でしょう。水稻農業の集約化、高度の技術的蓄積、水利のコントロールをめぐる社会的な軋轢、また文明成立の中核地域からの周辺地域への、各種の先端的物資(鉄、青銅、ガラスなど)および観念の流通、複雑な祭祀行為が共同体の運命に影響することの思想的共有など、多くの要因が存在する状況を、あらためて適応的な文化という理論的観点から考察していくことが、今後に必要なのではないかと考えます。

東北の場合、大陸(一次的国家)と日本列島という関係に加えて、列島中核地域(二次的国家)と周辺地域という二重の地域間関係の構造になっているわけです。そして、逆に北方

系の文化要素に認められるように、北からの流れとの接点地域でもあるという性格もあり複雑です。

### 「首長制」段階と日本国家の成立

館長の独自仮説では、縄文時代晩期から、弥生時代、そして古墳時代の始まりへの変化を読み解く際には、新進化主義人類学による社会組織形態モデルで「チーフダム」という段階の概念を、意識的に考察することが、重要であると考えています。漠然と使われることがある「威信財」概念は、なお一層の検討を要します。また日本列島全体では、「西国」と「東国」の対比、それに対して東北地方の特質という視点も、弥生時代から古墳時代への変動の考察では、非常に重要と思われます。このことは、後の時代における「蝦夷」の問題を考えるに際しても、本質的な観点と考えられます。

宮城県の考古学から事例を取り上げてみます。弥生後期の東北に独特の「天王山式土器」の時期、古墳時代前期の前方後円墳の北限（最北の前期古墳）、近年の大きな話題である栗原市入の沢遺跡（古墳時代前期の国内最北の拠点的な集落として、国史跡に指定）、北海道系の土器文化と黒曜石製スクレイパー、日本列島の初期国家「前方後円墳体制」への組み込み、その地域差、そして東北地方では古墳時代初期に出現する「方形周溝墓」の事例と意義、弥生時代終末と古墳時代初頭との間の、「**東北的断絶**」とでも言えそうな文化的乖離、などが、**相互に関連した一体的な課題**としてあります。いずれも膨大な先行研究がありますが、今回は「社会文化的統合のレベル」という視点を取り入れて、再考してみます。

### 名取市今熊野遺跡

方形周溝墓の県内初の発見は、名取市高館にある「今熊野遺跡」でした。1971年、72年に実施された、当時としては異例の大規模な面積の調査は、大きな反響がありました。古代の住居跡も多数見つかりました。宮城県教育庁に文化財保護課が設置されたのは、1973年のことでしたが、縄文時代前期の多数の竪穴住居跡発見の意義も合わせて、遺跡は保存されることになり、当県の文化財保護行政にとっての大きな画期と捉えられるでしょう。今年で調査から**50周年**になります。改めて方形周溝墓について、その意義を考えてみる機会になれば幸いです。

### 東北の弥生から古墳時代への変動

（講座ではスライド多数で、東北地方の弥生時代後期から、古墳時代前期についての研究史と事例紹介を通じて、時代的な転換と、地域的な様相の多様性の一端を説明しました。白河市天王山遺跡の後期弥生土器、土器型式の特徴、同遺跡の調査（1949～）と出土品（炭化米、炭化クリ、「アメリカ式石鏟」）、東北地方の主要古墳の詳細編年 - 藤沢敦氏による、古墳文化と北方的要素の相互交流 - 藤沢氏による、北限の前期前方後円墳 - 大崎市古川・青塚古墳、底部穿孔壺形土器、名取市今熊野遺跡の調査のようす、その成果の概略、方形周溝墓

の発見、出土土師器の特徴、仙台市太白区安久東遺跡の方形周溝墓、太白区戸ノ内遺跡の県内最大級の方形周溝墓、仙台市指定文化財の土師器壺、石巻市新山崎遺跡の方形周溝墓、石巻市新金沼遺跡の古墳時代集落と東海系土師器・北方系統縄文土器、栗原市入の沢遺跡―古墳時代前期・国内最北の拠点的な集落、会津坂下町杵ガ森古墳―最古級の前方後円墳か、文化庁巡回展「発掘された日本列島」石巻展、毛利・遠藤コレクションの里帰り、青森県七戸町猪ノ鼻(1)遺跡―北の地に はるばる来たか 古墳人―、などです。

お近くの方は、ぜひ講座会場まで、お運びください。当館職員一同、お待ちしております。)

## まとめにかえて

東北地方の弥生時代から古墳時代への文化変化・社会変動と、アメリカ新進化主義人類学との接続という、日本考古学においては、やや異質かもしれない館長独自の仮説的な考察を試行してみました。多くの異論もあることと思います。

本日の「お題」について若干まとめて、次回につなげたいと思います。

- 1 歴史学としての日本考古学、人類学としてのプロセス考古学、両者のパラダイムは大きく異なりますが、対象資料は同一です。すなわち遺跡・遺物です。
- 2 しかし、一国の考古学から始まる「帰納法的アプローチ」と、異文化を比較することから始まる「法則探索的アプローチ」は、理論的方法論的に大きな相違点と言えるでしょう。
- 3 「新進化主義人類学」、その中でもエルマン・サーヴィスらによる社会組織の諸形態に関する学説は、大きな示唆を有するでしょう。比較民族学から提出された学説ですが、考古学と文化人類学との総合に向かう考え方でしょう。その後、社会進化の学説は、民族学よりも考古学（プロセス考古学）が、課題を担う主体となっています。資料の時間的深さを有しないという民族学の宿命から、それは当然の発展的展開と考えられます。
- 4 バンド社会、部族社会、首長制社会、初期国家の、民族学からの形態・機能分析は、旧石器時代から縄文、弥生、古墳の各時代の考察にとって、大きな示唆に富むでしょう。それぞれ両者が対応するという考え方ではなく、形態分類を対照軸として、各時代の実態を考察することが重要でしょう。たとえば、バンドについては、後期旧石器時代から縄文時代早期までの考察に示唆的でしょう。
- 5 弥生時代から古墳時代の社会変化を考察するにあたり、新進化主義人類学にいう「首長制社会」(Chiefdom) の概念について再検討することが有効でしょう。首長制社会の類型について、生産物再分配型首長制社会、ビッグマン型有力者首長制社会、その他、文化人類学で蓄積されてきた民族誌記述から、民族誌学的現在 (ethnographic present) の内容について、考古学は仮説的考察の参考にすべきでしょう。そして仮説的検証は、遺跡・遺物からの「比較考古学」により、進めていくべきでしょう。
- 6 宮城県地方では、弥生時代後期から終末期と、古墳時代初期との間に文化的断絶が認められます。「東北的断絶」を理解するために、首長制社会という概念が有効かもしれません。そして具体的には、これまでの先学の研究成果に学ぶということに尽きるかもしれませ

ん。後期までの弥生社会における農耕と集落の展開、石包丁などの石器生産、土器型式の内容と広がり、「威信財」とされる文化現象の広がり、などを多角的に考察することが、一層重要でしょう。古墳時代初期については、上記の同じ視点に加えて、方形周溝墓の出現を再考察することも重要でしょう。

7 日本列島の初期国家について、「前方後円墳体制」に対しての、周縁地域としての東北地方における「対中核地域」関係の仮説的考察が重要と考えられます。東北地方の「在地首長層」の動向は、日本列島の国家形成以前から以後までを通して、一貫して重要な検討対象と考えられます。

ご清聴まことに有難うございました（最後までお読みいただき、有難うございました）。

（本稿は、当日スライドも踏まえつつ、講演内容に補足して加筆し、再構成したものです。会場では具体的に、アメリカ人類学の研究事例と、宮城県地方の事例を中心に説明しました。本稿では、限られた時間のお話では尽くせない理論的な部分を主として構成しました。なお参考文献は、日本語の入手・閲覧しやすいものから選択しています。）

## 参考文献

綾部恒雄編（1984）『文化人類学 15 の理論』中公新書。

エルマン・サーヴィス（1979、原著 1962）、松園万亀雄訳『未開の社会組織』人類学ゼミナール 12、弘文堂。

エルマン・サーヴィス（1979、原著 1971）、増田義郎監修『民族の世界』講談社。学術文庫版もあり（1991）。

須藤隆（2000）「弥生時代の東北地方」『宮城考古学』第 2 号、1 - 24 頁。（宮城県考古学会 HP からダウンロード可）。

仙台市史編さん委員会編（1999）「第 3 章 弥生時代」『仙台市史 通史編 1 原始』、281 - 416 頁。

ルイス・ビンフォード（2021、原著 1983）植木武訳者代表『過去を探究する—考古資料解読の方法と実践—』雄山閣。

藤沢敦（2020）「4.2 古墳と北方世界」上野祥史編『東アジアと倭の眼でみた古墳時代』国立歴史民俗博物館研究叢書 7、170 - 186 頁、朝倉書店。